日刊ゲンダイ　2013年（平成25年）4月17日（16日発行）

医者も知らない平穏死

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「『平穏死』10の条件」など。

連載㉗

1カ月半、自宅への見舞客は延べ何百人

Gさんはまだ20代。大学病院から届いた紹介状には、「末期の口腔がん」と書かれていました。すぐにご自宅を訪問すると、Gさんは顔面の片方が手術や放射線治療で欠損していて、激しい痛みで横を向いてしか寝られない状態でした。

痛みを制する麻薬の量を探るのに最初の1週間が費やされました。ようやく安静時の痛みはコントロールできましたが、体を動かすとやはり激痛が走る。だから、同じ方向を向いて寝たままだし、食事もほとんどできません。

Gさんがこの状態に満足しているか知りたくて、「もう1回、入院する？」と聞くと、即座に拒否されました。見るからにつらそうやけど、Gさんなりに在宅療養を楽しんでくれてるんや――。少しうれしくなったのを覚えています。

学生時代からとても人気者だったというGさん、自宅にはいつも大勢の見舞客が訪れていました。私が訪問すると、いつも友人たちが何人かGさんに、添い寝していました。

しかし、退院して1カ月半後、とうとう「お別れの時」が。家族にみとりの話をした後、一度、いとまをし、深夜もう一度訪問しました。驚きました。100人以上の友人や知人が集まり、静かに祈っているのです。

幸いなことに、その夜をGさんは乗り越えました。翌日、Gさんの様子を見に伺うと、もっと多くの人がGさんを見送るために集まっていました。

さらに1日経過した深夜。息を引き取ったという連絡があり、Gさんに会いにいくと、彼の名前を叫びながら涙を流している人でいっぱい……。

後で聞くと、自宅で過ごした1カ月半の間に、延べ何百人もの人が彼のもとを訪れたそうです。最期の貴重な時間を、自宅でご家族や友人たちとずっと一緒に過ごされたGさん。在宅で、という彼の選択は、正しかったと痛感させられました。

（写真はイメージ）